

神よ、わたしのために清い心を創造し、
わたしのうちに新しい、確かな霊を与えてください。
御前から私を退けず、あなたの聖なる霊を取り上げないで下さい。

(詩編 51 の 12-13)

Create in me a pure heart, O God, and renew a steadfast spirit within me.
Do not cast me away from your presence, and do not take your holy spirit
from me.

誰でも、憎しみや不正な心によって汚れた心よりも、清い心を好む。嘘をつかれて喜ぶ人などだれもいないのであって、このようなことから、嘘のない真実な心を万人が無意識的に求めているということはすぐにわかることである。しかし、そのような清い心、真実な心は、努力して得られるだろうか。

学校とかその他至る所で、人間の努力が変えるのだ、というような主張がなされている。しかし、清い心、正義に満ちた心、不正に立ち向かう勇気ある心、誰にでも差別なく向かうような愛の心等々それらは努力によって身につくものだろうか。

どんなに努力してもなお、私たちのなかには清くない心がいくらでも残り、真実な愛にはそぐわない心の動きが残り続けることを痛感するだろう。使徒パウロは、彼の書いた手紙が聖書としてたくさん収められていることからわかるが、歴史上で最も神の霊を受け、清められたといえるような人であるが、その彼は どんなによいことをしようと思っても、できない、自分は死のからだだ、という深い実感を書き記している。

そのような人間の努力の限界を聖書は一貫して述べてあり、そこから清い心、愛の心などは、神によってあらたに創造してもらわないと人は、持つことができないことを指し示している。

このことは、人間の本質の深い平等性を表すものとなっている。生まれつき健康であるとかいろいろな能力があるといったことに関係なく、清い真実な心は、みな神による新たな清い心を創造していただかねば持つことができないのである。

新しい年を迎えて、神を信じつつ、自分の決意ということだけでなく、神が清い心を創造し、私たちの魂の内に確かな霊を与えて下さるようにと祈りを深めたいと願う。

御手のわざなる自然



吉野川 2008.12.14

これは私にとっては何度見ても見飽きることのない、吉野川の光景です。満ちみちた水量をたたえた川！説明なしにこの写真を見る人は、川とは思えないのではないかとおもいます。確かに、私が今まで実際に見た、日本の北海道から九州のどの川

よりも豊かな水量で、このような川幅1キロを越えるような川、海のようなゆたかさをたたえた川は見たことがありません。

何十年来、私は一週間に少なくとも一度は、この吉野川の堤防道路を通り、橋を渡っていますが、いつ通っても心を惹かれます。そして、河口近くであっても、水はきれいで、付近に大きな建物もなく、水と空と川岸の植物などが近づくものにかわりぬ賜物を与えてくれています。この川は、農業など産業にも重要なことはもちろんですが、周辺の人々の心にはかりしれない神様からの心のプレゼントを提供しつづけてきたのです。

吉野川は、西から東へと流れているため、朝は朝日が、この川の東のほうから上るのが見られるし、夕方には、夕日が、空を赤く染めつつ、川面にもその赤い夕日や空を映しつつ沈んでいくのは、心をひきつけてやまない光景であり、地上と大空にわたって描かれる神の雄大な絵画となります。

川の流れは、ほとんどだれの心にも何かほっとするものを与えるものです。水はうるおすもの、命に不可欠なものであり、その流れのすがたの美しさは心の栄養となります。聖書においても、人間の究極的な魂のすがたは、そのいのちの水があふれだす状態だと書いています。

「私(イエス)を信じる者は、いのちの水が川となってあふれ出るようになる」(ヨハネ福音書 7 の 38)

これは河口から5キロ近く上流での撮影です。右端のほう为上流で、ほぼまっすぐに西に 80 キロあまり上流にさかのぼると香川県と愛媛県に近い池田町に達します。

吉野川は、愛媛県と高知県境にそびえる瓶ヶ森(かめがもり 標高 18962m)付近から流れ出て、四国四県に本流、支流が流れている、四国最大の川で、194km の長さを持っています。

左に一部見えるのは眉山で、その右、はるか後方にかすんで見えるのが、剣山へと連なる山なみで 1000~1400 メートル余りの標高があり、剣山に向かって次第に高くなっていきます。中央右寄りにうっすらと見えるのが、高越山(こうつさん、1133メートル)で、いずれも私が若いときに、何度となく、縦走したり、登った山々です。

遠くの間々、そしてこの写真のような川、それらは見るだけでも、変ることなく御国からのおとずれを私たちに送りつづけるものです。(写真、文ともに T.YOSHIMURA)

今月から、植物だけでなく、私が撮影した自然の風物の写真も折々に入れることにしました。